

氏 名	いた くら げん いち ろう 板 倉 巖 一 郎
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 266 号
学位授与の日付	平 成 16 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	The Magician's Apprenticeship: John Fowles and Quest For Authenticity (魔術師の修業時代—ジョン・ファウルズと本来性の探求)
論文調査委員	(主 査) 助教授 佐々木 徹 教授 若 島 正 助教授 廣 田 篤 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論の目的は、現代イギリスを代表する小説家ジョン・ファウルズ (John Fowles) がこれまで発表した5つの小説作品を分析し、その重要な主題である個人の「本来性 (authenticity)」がどのように表現されてきたかを跡づけることにある。Fowlesは *The Magus* (1966; 1977) で人は「魔術を超える真実など存在しない」という認識に達したときに「魔術師」となるという寓話に触れており、その意味で彼は小説という「魔術」を超える真実など存在しないというポストモダンの認識の持ち主であるかのように見える。その一方で、Fowlesは *The Magus* の言葉を借りれば「教育的」(didactic) な作家でもある。彼は常に主人公を通じて「本来的」(authentic) な生き方を探っており、多くの作品は「探求」(quest) の主題を中心に据えている。Fowlesは小説家といういわば「魔術師」であるにもかかわらず、現代の聖杯とも言うべき「本来的」な生を獲得した「魔術師」たるべく修業を続ける一個人としての自画像を常に提示している。本論では、先行研究の成果を踏まえつつ、この作家が「本来性の探求」という主題をどのように作品中に位置づけてきたかについて考察する。

Fowlesの「本来性」の概念は、大きく分けて三段階に発展してきていると考えられる。まず、序論でノンフィクション作品 *The Aristos* (1964; 1980) に触れ、彼が Jean-Paul Sartre の「本来性」の概念をいかに吸収し、中世文学などから学んだ「探求」の主題といかに融合させていったか概観する。その後、Fowlesの変化の三段階をほぼ時系列に沿って考察する。第一段階に位置する作品は、最初の二章で分析する *The Collector* (1963) と *The Magus* である。これらの作品では、「本来性」の探求は自己や他者を取り巻く幻想からの脱却として捉えられており、「本来的」な生き方の推奨よりも家父長制的な価値観や伝統的な階級意識への追従から生まれる「非本来的」な生き方への批判に終始する。続く第二段階として、第三章で彼の代表作 *The French Lieutenant's Woman* (1969) を取り上げる。この作品でもまた、「本来性」が幻想からの脱却を経て成り立つものだという考えに変わりはない。しかし、この作品では第一段階を特徴づける「非本来的」な生き方への批判とは別に、「本来性」が獲得される希望が垣間見える。第三段階では、第一段階の合理的批判精神や悲観論とはうって変わり、「本来的」な生の到達が楽観的に賞賛される。最後の二章で考察する *Daniel Martin* (1977) と *A Maggot* (1985) では、主人公はエピファニーやロマン派的な幻視にも似た非合理的な体験によって「本来性」を獲得する。結論では、こういったFowlesの変化を、初期のSartreへの傾倒とそこからの離反によって、あるいは *The Aristos* から *The Tree* (1977) への変化によって説明する。彼は究極的には「本質」(essence) よりも、個々人やその非合理的な体験や美といった「存在」(existence) に関心を持っている。このことがある特定の集団の批判よりも個人の非合理的な体験へと、そしてCleggの作り物の自然から *Daniel Martin* の Devonshire や *A Maggot* の June Eternal へと向かわせたのではないかと考察する。

なお、各章の概要は以下の通りである。

第一章

The Collector の主題は、「階級」(class) と「性」(sex) という二つの「神経症」である。これは、誘拐犯 Frederick

Clegg のみならず、程度の差こそあれ被害者 Miranda Grey も悩まされている現代の病理を指す。

Clegg の「性」に対する「神経症」は、彼が「向上心」(aspirations) と呼ぶものと深く関わっている。彼は自分が性的に慎み深く「向上心」があると考え、その証拠として Miranda を愛していることを挙げている。彼は Miranda を、宮廷恋愛物語の中世騎士のように偶像視するが、それは矛盾のある本来の彼女の姿を認められないということでもある。彼は Miranda に中世宮廷恋愛物語の淑女のような虚像を、自分自身に中世騎士や道徳教師のような虚像を与え、挙げ句の果てに「ロマンスを壊した」として彼女を罰するはめになる。

Clegg の「階級」に対する「神経症」も、「向上心」と深く関わっている。労働者階級出身者である彼は中産階級的なものを盲目的に崇拝する。彼は中産階級の言葉を真似ようとし、Miranda の言うがままに画集やレコードを買いあさる。こういった行動によって彼が求めているのは、彼自身の社会的地位の向上でもなければ芸術鑑賞能力の向上でもない。むしろ、自分が Miranda と見合った、あるいはそれ以上の階級にいるという虚像に他ならない。

こういった自己や他者に対する虚像は、Miranda も持っている。彼女は絵画教師 George Paston の性的に墮落した本来の姿を見ずに彼を偶像視し、彼を「理解できる」自分を道徳的に高い存在だと誤って考える。彼女の「中産階級的なもの」に対する反発はすべて当時の新左翼のキャッチフレーズを並べただけのもので、実際には彼女も強い階級意識を持っている。彼女は新左翼の価値観を「理解できる」自分に自由主義者という虚像を与えているだけである。彼女は Clegg の無知や「神経症」を軽蔑するが、結局のところこの二人は同じ「神経症」患者だと言える。

この作品が悲観的であるとすれば、「善良」な Miranda が「邪悪」な Clegg に誘拐されて死ぬからではない。二人が「神経症」によって自己や他者に対する虚像から抜け出せず、相手を決して受け入れることが出来ないからである。そして、この「神経症」こそ正しい自己のあり方の追求や他者との関係の回復の最大の障害と言えよう。

第二章

幻想の呪縛という主題は、*The Magus* に受け継がれる。主人公 Nicholas Urfe は女性に対する男性中心主義的な幻想から抜け出せず、結局は彼を愛する女性 Alison Kelly を失うことになる。この作品では Nicholas の利己主義が「男性的」な暴力や知性ですべてを理解しようとする主知主義的な傾向と結びつけられ、自然と一体化したような Alison の「女性原理」と対置させられており、ここに Fowles 特有の D. H. Lawrence 解釈が見られる。

まず初めに、Nicholas の「成長」に関する疑問を解決する。彼が「成長」したのかどうか、そしてどのように「成長」したのか(しなかったのか)について、一致した見解が見られないからである。本論では Nicholas と Alison が対峙する三つの場面での彼の言動を比較することで、彼の「成長」説を否定する。というのも、Nicholas の Alison、あるいは女性に対する態度が基本的に改善されないからである。彼は女性を売春婦扱いして軽蔑するか、芸術品として偶像視するだけである。いずれの場合も、女性を彼の頭の中にある台本の登場人物にすり替え、そのことによって彼女たちを支配しようとする欲望に根ざしたものである。そして彼の持つ欲望や男性原理は、標題の「魔術師」である Maurice Conchis の「神様遊び」(godgame) によってグロテスクな形で表現されていたものである。Nicholas は Conchis の警告を聞くことさえできなかったのである。

Nicholas が学ぶべきであった価値観とは、結末で彼が見ることを恐れていた Alison の「愛」であり、彼女によって代表される女性原理である。Alison は Nicholas が軽蔑して「無知と勇気」と呼ぶようなものを持っており、このことが他者に献身的な無償の愛情を注ぐことを可能にし、言葉の通じない相手とも親密な関係を結ぶことを可能にしている。Nicholas が既存の知識や自分の頭の中にしか存在しない幻想にとらわれている一方で、Alison は「無知と勇気」で他者や自然の本質、あるいは Fowles が「存在性」(existing-ness) と呼ぶものと、直接的に触れ合うことが出来る。これは Fowles が影響を自認する Lawrence の作品に繰り返し現れる「肉体の生」(life in the flesh) と同様の考え方である。Nicholas のまがいものに囚われた「非本来的」な生に対し、Fowles は「肉体の生」を「本来的」な生として賞賛している。

第三章

The French Lieutenant's Woman はこれまで同様幻想の呪縛や「非本来的」な生き方への批判を特徴としながら、一方で過去の二作品になかった楽観的な側面を持つ「過渡的」な作品である。

主人公 Charles Smithson は、*The Magus* の Nicholas と同様、自分の生み出した幻想に囚われている。彼は Sarah

Woodruff に惹かれていくが、彼女自身の存在にではなく、彼女を取り巻く「墮落した女」という幻想に惹かれただけである。これはヴィクトリア朝中後期の女性のステレオタイプに基づいた幻想であると同時に、Fowlesがこれまで追求してきた現代的な男性中心主義的な女性への幻想でもある。

Sarah もまた幻想と戦う個人である。彼女は感情の親密さに基づく他者との関係を築き上げようとする一方で、自己の「本来的」なあり方を追求しようとしている。前者は第一の結末で見られるように Charles との結婚で成立しうるものだが、プラトニックな恋愛というナラティブに身を任せ、「本来性」とは遠い生を余儀なくされる。一方、後者は第二の結末で見られるように恋人を失うというリスクを負うが、「本来的」なあり方とはその犠牲に見合うものである。

一方で、Charles が結末で無力感を持つ場面には、前二作になかった希望が感じられる。彼が「本質」に拘泥して見ずにいた「存在」に取り囲まれ、新たな一個人として再生するといったイメージが強く印象づけられるからだ。この希望が続く二作で中心的地位を占めることとなる。

第四章

次作 *Daniel Martin* は前二作と似ているが、結論が決定的に異なる。主人公は作者から理性的に批判されるのではなく、エピファニー的な体験と過去との和解といういわば一見非合理的な体験を通じて「本来性」を獲得するからだ。

この作品の主題は「幽霊」(ghost) である。主人公 Daniel は、親友であり「父親代理」(father surrogate) 的存在であった、そして瀕死の状態にある Anthony Mallory に懇願され、Daniel とかつて肉体関係があり、現在は Anthony の妻となっている Jane の「葬り去られた部分」を「掘り起こす」(disinter) ことになる。Anthony の死後、Daniel はその約束を実行し、彼自身と Jane の過去のみならず、Anthony に似た彼の父親と Devonshire で過ごした記憶といった、彼が「疫祓い」(exorcise) した「幽霊」を「掘り起こす」ことになる。そして、Jane と再び結ばれ、エピファニー的な体験を持つことで、彼は「幽霊」たちとの和解を果たす。

「幽霊」は Daniel の過去や彼の死んだ父だけに留まらない。彼の父が象徴していた価値観もある種の「幽霊」として彼につきまといてきたものであり、これとも和解している。彼は父の大英帝国 (British Empire) 的な側面ではなく、イングランド (England) 的な側面に惹かれ、父が好んだ伝統的な田舎の生活に愛着を覚えるようになる。この作品は、英文学がモダニズム以降扱ってきた「父との和解」のみならず、伝統的価値観への回帰を目指す「小イングランド主義」(Little England-ism) や彼の言う「緑のイングランド」の伝統をも「掘り起こす」ことになる。Fowles は、Daniel を通して、T. S. Eliot や D. H. Lawrence といった「幽霊」たちと和解したと言える。

Daniel Martin では、「本来性の探求」というこれまでの主題と、非合理的な幻視体験と伝統への回帰が不可分なものとして結びついている。これらは個人の存在の非合理性や個人を解放してくれる自然への関心となって次作に受け継がれる。

第五章

最新作 *A Maggot* は、最も楽観的な作品である。主人 Rebecca Lee は超自然的な体験によって「本来的」な生き方へと到達しており、その意味で Fowles 作品の中で最も現実離れしていると言える。

この作品を特徴づけるのは主人公 Rebecca の宗教的体験であり、それが体現している女性原理である。これは彼女の出産のみならず、彼女が幻視した June Eternal の母系的原始共産社会に、そして貴族の失踪と従者の死を「復活」と読み替える、あるいは無機質な飛行物体を「蛆虫」(maggot) と読み替える彼女の想像力にも見られる。ここでの女性原理は生命の原理であり自然の摂理である。

Rebecca の幻視体験は Fowles 的な「探求」をより非合理的なものとして提示している。Rebecca は Bartholomew と名乗る貴族のもとで自分自身に対する虚像や幻想を捨て去るが、この行為自体はこれまでの Fowles 作品の規範を外れるものではない。超自然現象を通じて、また宗教的な述語で語られているものの、彼女の現実認識は極めて実存主義的である。だが、彼女のエピファニー的な体験や「本来的」なあり方への強い信念はこれまで見られなかったものである。この非合理的な体験や自己肯定はある種の「信仰の飛躍」(leap of faith) とも言うべきであろう。

Rebecca を「本来的」なあり方の体現者として示したことは、作者 Fowles の「本来性」あるいは「探求」に対する姿勢の変化を物語っている。現代の精神風土に対する合理的な批判者であることよりも、彼は宇宙船に生命を与えるような生に満ちあふれた想像力を肯定する信念の人であることを選んだのであろう。

論文審査の結果の要旨

20世紀後半のイギリス文学を代表する小説家 John Fowles (1926-) は、その作品の幾つかがベストセラーになり、かつ映画化されているという事実が示すように、一般読者の間で広い人気を獲得すると同時に、批評家・研究者にも高く評価されている珍しい存在である。彼が *The Collector* で衝撃的なデビューを果たしたのは1963年であったが、長編第二作にあたる *The Magus* を執筆し始めたのは50年代のことである。この頃、イギリスの文壇を賑わしていたのは、既成社会の制度に反抗の意を露にした「怒れる若者たち」であった。しかし、主として労働者階級の憤懣を梃子にした彼らとは異なり、ファウルズはヨーロッパ的な、「知的な」小説家を志向した。同じ時期に出た Iris Murdoch と同様、彼の作品は豊かな物語性を持つと共に、哲学的な色彩を濃厚に帯びている。サルトルの影響を強く受けたファウルズにとっての最も主要な関心事は、人間にとっての「自由」の問題と、個人の「本来性 (authenticity) の探求」と言えるであろう。本論は彼の主要な長編作品5つを取り上げて、特に後者の主題が作者において如何に発展させられてきたかを検証しようとする試みである。

蝶の収集を趣味とする青年が、若い女性を誘拐して地下室で飼育する——*The Collector* のこのショッキングな物語の主題は、論者によれば、「階級」と「性」という二つの「神経症」である。犯人のクレグは中産階級的な価値観と騎士道的な女性観の虚像を作り上げ、それに妄執する。一方、彼よりは上の社会階層に属する被害者のミランダにも誤った階級意識や歪んだ性意識など、同種の神経症が見られる。つまり、二人とも本来の自己に直面できない人物である。論者は第一章でこれらを犀利な分析によって明らかにし、以下の論の出発点を着実に確立している。

第二章で扱われる *The Magus* (1966) は、実存主義者を標榜する主人公ニコラスが、謎の人物「魔術師」コンヒスの演出する godgame によって自分の生き方の「非本来性」(inauthenticity) を教えられるという小説である。どの程度彼がその教訓を学んだのかは作品中にははっきり書かれていないため、意見の分かれるところであるが、論者は説得力のある読みに基づいて、主人公は最後まで男性中心的な幻想に捕らわれて成長していないと主張する。さらに、ニコラスの恋人アリソンが女性原理を体現するという構想の根本に D. H. Lawrence の影響があると述べ、その根拠を *Women in Love* など具体的なテキストの引用によって明確に示している。ファウルズがロレンスを敬愛しているのは彼のエッセイやインタビューを読めば明らかであるものの、不思議なことにこの点を掘り下げた論文は未だに刊行されておらず、本論での論証はその意味で大きな価値がある。

Doris Lessing, *The Golden Notebook* (1962), Angus Wilson, *No Laughing Matter* (1967), Murdoch, *The Black Prince* (1973) など、60,70年代に書かれた小説には「リアリズム」という約束事に対する不安や不満が顕著に見られる。虚構の世界にのみ存在する「エンディング」なるものを無理やり作品に与えることで、リアリズム小説はある意味で必然的に inauthentic たらざるを得ない。そこで、19世紀を題材にしたファウルズの歴史小説 *The French Lieutenant's Woman* (1969) には複数の結末が用意されており、そのどれを選ぶかは読者に任された格好になっている。*The Magus* の改訂版 (1977) においても結末がより曖昧になったと解釈することが可能なため、この時期のファウルズは実存主義からポスト構造主義へ移行し、遊戯的な「自由」を作者として楽しむだけになったという見解もあるのだが、本論ではそれとは異なる作家像が提出されている。すなわち、論者は第三章で、主人公チャールズの置かれた状況は基本的には *The Magus* におけるニコラスのそれに等しいが、最後に置かれた結末では、チャールズがはっきりと目的意識を持って「本来性」への探求に乗り出すと解釈し、一貫したテーマを追及してきた作者がここでは前作に比して楽観的な態度を示していると結論するのである。

第四章では、この楽観性が次作 *Daniel Martin* (1977) にも受け継がれている、と論じられる。父親、親友、愛人との纏れた関係を整理することで真の自分を発見しようともがいてきた主人公ダニエルは、確かに、結末で epiphany (啓示の瞬間) を経験する。論者はこれを、個人を解放する力を持つ「自然」という存在に対する作者の関心に帰するものと断案する。この議論は英国の伝統的な価値観、いわゆる Englishness の問題をめぐって発展させられており、その過程で明らかにされる本作とロレンス文学との関係の指摘は示唆に富んでいる。

A Maggot (1985) は、キリスト教の一派 Shakers の起源にからむ歴史小説であり、物語の中心にあるのは主人公レベッカが天上の楽園を幻視する超自然的な体験である。この事件もやはり曖昧な形で提示されており、その解釈は読者に委ねら

れている。第五章において、論者はレベッカの宗教体験を「本来性の探求」のテーマの一環と見ることで意味づけしようとする。そのように捉えるならば、ファウルズがロレンス流の「自然」意識に接近しつつ、作を重ねるごとに非合理的、楽観的になっているとする結論には妥当性がある。ただし、*Daniel Martin* の結末に見られた啓示があくまで世俗的なものであったのに対して、ここでは宗教的な要素が強くなっているのであるから、自ら無神論者であると主張する作者の宗教観と本作との関係について、もう少し踏み込んだ論及があってもよかったであろう。また、これ以後作者が小説を発表していないという事実に関する考察が不足している点も惜しまれる。今後の研究に期待したいところである。

ファウルズは現存するイギリスの作家としてはおそらく最もよく研究されている作家である。論者は既に刊行された多くの研究書や雑誌論文を丹念に渉猟し、その上で独自の観点を発見しようと努力している。もっとも、先行研究を読めば読むほど、独創的な見解を提出することは困難になるわけで、その点本論にも物足りなさがないではない。しかし、ロレンス作品との緻密な比較などは、ファウルズ研究に対する極めて有意義な貢献であると考えられる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年12月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。